

東京大学史史料室ニュース

第4号 1989・11・25

目次

本郷キャンパスの道路・広場に名称を …	2
『宇佐美・下賀茂寮四十年通史』 ……	3
グラバー邸の謎を追って ……	4
『東京大学生産技術研究所・40周年誌』 …	5
『文部大臣准允』について ……	6
受贈図書一覧 ……	7
史料室日誌抄録 ……	8



台湾演習林の台中州新高郡蕃地和社溪の禁伐林。標高4,600尺(約1,390m)、樹種は樟(くす、天然)。

昭和11年4月撮影。

(内田祥三文書)

東京帝国大学農学部附属台湾演習林は、台中州竹山、新高2郡にまたがって明治35年設置されたもので、新高山山頂(海拔3,950m)を含み、亜熱帯から寒帯にいたる総ての植物帯を備えていた。最大時は57,000haに及び、本学最大の演習林であった。

昭和20年12月中華民国台湾省林務局に接收された。

本郷キャンパスの道路・広場に名称を

阪口 豊

来年3月に定年を迎える私は、目下『東京大学史紀要』第8号に掲載予定の「卒業論文」：「東京大学の土台一本郷キャンパスの地形と地質」を執筆中であるが、困ったことが起こった。それは地形を記述するときに、場所を示すのに準拠する適当な地名がないことである。文才のない悲しさ、「附属図書館協のアーケードに通ずる南北道路」などといったまことに無味乾燥な表現になってしまう。もしも、外国の都市のようにキャンパスの道路や広場にも名称がついていたら、記述はもう少し簡単明瞭に、しかもヴィヴィッドになるのではなからうかと思ったことである。施設部に伺ったがそのような名称はないという。昭和20～25年頃に在学していた先輩に聞くと、赤門から正門に至る舗道脇の塀寄りにある踏みわけ道を「哲学の道」と呼んでいたという。ひょっとしてこの外にも私の知らない道路の名称があるのかも知れないが。

そこで思い出すのは、かつて在外研究員として滞在したウィーンの街路名のことである。このまちの街路名については『Lexikon der Wiener Straßennamen』（ウィーン街路名辞典、1964）というのが市販されていて、すべての街路名の由来が説明されている。井の中の蛙的な知識であるが、ウィーンに限らず海外の都市には街路名がついているのが普通であるように思う。日本の都市にも京都を始め部分的に街路名をもつまちもないわけではない。さて、この辞典の対象になっているのは街路だけではなく、公園、広場、公共建物名を含んでいる。街路は *Straße*、*Gasse*、*Weg*、*Steig* と四つの言葉が使われているが、大部分は前二者で、後二者は小道、路地のような道路に使われているようである。街路名として使われている名称は、人名、動物名、岩石・鉱物名、歴史上の事件、伝説名、建造物名、音楽の曲名、民族名など多岐にわたっ

ており、私の専門の地学関係者の人名も、大陸移動説で有名なアルフレート・ヴェーゲナーを初め27名に及んでいる。興味あるのは、「カール・マルクス・ホーフ」、「フリードリヒ・エンゲルス広場」とか「ローザ・ルクセンブルク街」というのがあり、1930年代前半の社民党政権時代の遺産がそのまま残されていて、Weaner（ウィーンっ子）の見識の深さを知る思いがする。

そこで、わが本郷キャンパスの道路にも、東京大学の歴史に関係ある由緒ある名称をつけてはどうかと思うのである。名称をつける道路の区分は都市工学教室の協力を得たらよいだろう。次にその区分に従って、史料の保存に関する委員会で知恵をしぼって原案をつくる。たとえば我田引水になるが、理学部1号館から弥生門までの道路を「菊池（大麓）通り」とする。明治24年（1891）の濃尾地震を機に、当時理科大学長だった菊池大麓の建議案によって明治25年文部省の機関として「震災予防調査会」が発足した。初代会長は帝国大学総長加藤弘之、間もなく菊池が会長になる。その事業の一環として地下温度の観測井の掘さくが明治27年（1894）に開始され、明治31年（1898）に419.1mまで掘進したが、工事困難のため中止、その後孔壁からの岩石の崩落で埋まり385.2mとなった。弥生門に向かって道路右側にある片流れ屋根の白い小屋の中におさまっている、いわゆる「380m井」である。「菊池通り」と呼んだらどうかという思いつきの根拠はここにある。

本郷キャンパス構内の建物や道路の変遷は目まぐるしく、道路名の候補にあがった人物、事象などを今日の道路、建物と関連づけるのは無理である。結局、現在の建物と関連させて、その建物に属する教室、施設等に関係ある人物名、事象名などをつけることになるだろう。むしろその方がキャンパスの住人に

としては親しみもわき都合がよいのではあるまいか。たとえば、理学部動物学教室の初代教授 E. S. モースと現在の理学部 2 号館は直接関係はないが、同館西側の正面玄関前の道路を「モース通り」とするのも一案である。この道路は総合研究資料館の正面玄関までとする。同館にはモースの遺品が収蔵されている。

こうして出来た原案を各部局で検討してもらい修正のうえ、しかるべき手続きをふんで正式決定し、大学広報で公開する。その後、

広報に名称の由来について順次簡単な説明を連載する。また道路に案内板を立てて衆知をはかる。連載が終わったところで一まとめにして小冊子にして教職員や、毎年進学してくる学生にガイダンスの資料の一部として配る。本郷キャンパスの住人に、東京大学の歴史への関心と大学への愛着を呼びおこすよすがになるのではないだろうか。また、アーカイヴズの重要性に対する意識を高めるのにも役立つのではあるまいか。

(理学部 教授)

新刊沿革史

『宇佐美・下賀茂寮四十年通史』

伊豆半島東海岸にある下賀茂寮開寮20周年、その前身の旧宇佐美寮移管から数えて40周年を記念して、学生部の手により編集され、昨年8月に刊行された。A5判124頁(写真・表紙除く)。運動会(他大学の体育会に相当)の五つの寮(ほかに戸田、山中、谷川、乗鞍)の一つである。

下賀茂寮の前身は、房総半島館山海岸に明治42年に設けられた一高水泳部の寮(43年詠婦寮と命名)である。大正12年の関東大震災で全壊した後、伊豆半島宇佐美の高台に移転し、昭和24年に東大に移管された際に宇佐美寮と改名された。しかし、その宇佐美寮も昭和40年10月廃寮となり、その代替施設として昭和42年に現在地に設けられたのが下賀茂寮である。

本書は、「宇佐美編」、「旧宇佐美寮史より」(寮史からの転載)、「下賀茂編」の3部からなり、寮の運営にかかわった運動会関係者や地元の方々の回想と座談会が主要な内容である。

回想記、座談会が主体となったのは、昭和40年の宇佐美寮廃寮にともない大講堂に収められていた寮日誌等が、東大紛争の際の攻防戦で消失したからだ、ということで、本書編纂の苦労が察せられる。

座談会、回想記には、宇佐美寮の敷地競売

問題の立退き料の裏話、公務員の定員削減にともなう昭和59年の下賀茂寮廃寮問題、昭和61年のテニスコート落成、下賀茂寮開寮当初の2件の水死事故、そしてその経験から寮委員が寮生に運動部式の朝の体操をさせるようになったこと(今ではもう行われていないが)など、寮史の重要な問題が語られ、寮の40年間の通史が浮かび上がって来る。また、本郷の運動会の窓口顔に顔を出さなければ利用許可が出せない現状を簡素化して、現地で入寮手続きができるようにすべきだ、などの意見もあげられている。

しかし、本書の特色は、回想の中に寮委員を務めた東大運動部学生の特異な生活が浮かび上がっていることにある。現在は「旅館のお客さん並に扱われている」寮生(一般学生利用者)を、かつては寮委員がもっと「手荒に扱っていた」こと。寮委員になって、どんなに飲んでも酒に不自由することがなく、「夜中の青野川の川辺で高歌放吟する楽しさを知り、アスファルトの上で寝る暖かさ、心地好さの虜になった」思い出。「先輩の理不尽な命令、阿鼻叫喚のコンパ」が面白いと感じられるほど世間的な常識から外れた生活と、それから生まれる寮委員の仲間意識。その粗野な連中が、宇佐美寮の角の煙草屋の高校2年生の看板娘「広ちゃん」を相手に紳士的に振舞っていたこと。などなど。——寮委員による「油断はできないが安心はできる」日常の寮運営の様子が、寮に対する思い入れとともに伝わって来る。

グラバー邸の謎を追って

藤森照信

建築史という分野が建築学の中にあることを知っている人はいても、いったい何をしているのかについてはあまりなじみがなくて知らない人がほとんどだと思う。

名のとおり建築物の歴史を研究するわけだが、方法的には考古学と歴史学の両方のやり方を使うところに一つの特徴があって、文献が少なく建物だけがある民家のような場合は考古学に近づくと、建物はすでに消えていて記録だけがある古社寺の場合には歴史学と変わらなくなる。

こうした実物と文献の二つにまたがってやる方法というのは、もちろん私が専攻している日本近代建築史の場合も同じである。近代建築史というのはいわゆる西洋館を対象にしているから、時代的には新しいわけで、考古学的なものだけがたよりの研究はないのがふつうだが、しかし、幕末のごく初期の西洋館になるとにわかに考古学化する。

たとえば、ご存知の長崎のグラバー邸があるが、あれは幕末にグラバーの家として建てられたということ以上の何も分かっていなくて謎が多い。

その最大の謎は、独得の平面形式にある。ふつう同時期の長崎の外人商人の洋館は四角な平面の南側や東西の面にベランダを回した形式なのに、グラバー邸だけは四角くなくて、三方に半円の部屋が張り出したようなクローバーの葉の形になっている。

四角な単調な平面に比べはるかに変化に富んでいて素晴らしいものなのだが、しかし困ったことに、なんで長崎にこのような形があるのか手がかりがない。もし、似たようなのがあれば、それとの比較で前後関係や発展過程の推測もできるのだが、長崎にも横浜にも神戸にも類例はない。

考古学にたとえれば、一番見事な土器なのに形式が孤立していて歴史的に扱うのに困っ

てしまうようなことになっている。

こうしたのがヨーロッパにあれば話しは簡単だが、ヨーロッパには基本的にベランダ付の建築はごく少数派だし、クローバー型なんてのは皆無だ。

となると、幕末に中国の上海や香港あたりから長崎にやってきたのでは、と考えたくなる。私もそのように考えて、ここ数年、日中共同調査の中でつとにクローバー型に注目してきた。

一番期待したのは上海と香港で、この二都市は長崎の手本となったから、現地で“建築探偵”をやれば一つや二つは出てくると思ったが、しかし全域を見つくしたが無いし、古写真や絵にも現れない。その他の旧居留地都市を次々に調べる中でも現れない。

そこでもう諦めていたのだが、助手の村松伸氏と北京に留学中の大学院学生の西沢泰彦君がアモイの島を調べた時にアヤシイ物件が発見された。しかし二人が行った時は中に入れてもらえないうえに絶壁の上にあるから全景の把握が不可能で確認ができなかった。

そこで前回調査に行った時、改めてアタックしてみた。中国の現地の先生が同行してくれた威力は絶大で、中に入れてもらえたばかりか、実測まで許していただいた。

まちがいなくクローバー型であった。

グラバー邸はついに兄弟が見つかったのである。

当初はジャーディン・マジソン商会のアモイ支店長邸として建てられたことが敷地の入口の石の門柱に刻まれた文字から判明した。グラバーはジャーディン・マジソンの長崎代理店をやっていたから兄弟の縁は実に深い。

となると誰でも、アモイの方が先で、長崎は弟と考えるが、どうもこれがちがうのだ。グラバー邸の方がどう計算しても10年以上も早い。

これまでの調査の成果だけからいうと、グラバー邸がクローバー型で作られ、それが中国のアモイに逆輸入、という筋道になってしまう。

いろいろ考えたが、私は、そうだったので

はないか、と今は考えている。長崎に一輪の花が咲き、その種が南にとんで行ったっていいじゃないか。

(生産技術研究所 助教授)

新刊沿革史

『東京大学生産技術研究所・40周年誌』

同誌は、昭和24年5月31日公布の国立学校設置法（即日施行）により、本学に生産技術研究所（以下、生研）が設置されて40年となるのを記念して、生研が5月に発行したものである。生研の月刊誌『生産研究』の特集号（第41巻第5号、通巻476号）で、B5判264頁（表紙除く）全部が、特集にあてられている。

生研は、昭和34年に10周年誌を発行する際、10年ごとに記録誌を刊行することを企画し、以来、20周年誌、30周年誌をやはり『生産研究』の特集号として発行し、それぞれ10年間の沿革をまとめて来た。今回の記念誌も基本的に10年毎の構想にのりもので、1979年から88年に至る10年間の同所の歩みを、主に研究と教育の面から記録したものである。

表紙は、六本木にある生研の航空写真である。従来の記念誌では、敷地真上からのモノクロ航空写真であったが、今回は斜め上空からのカラー写真となっている。変更には賛否両論あったということで、記録性に配慮して、従来のスタイルの写真も別に掲載されている。

表紙をめくると、各研究室の成果を紹介するカラーグラビアに始まり、10年間を点描するクラビア、続いて現所長の挨拶、各氏の祝辞がある。そして記念誌恒例の座談会「生研の進むべき道」、10年間の研究所、10年間の研究活動があり、各研究部・センターの研究概要、千葉実験所等の施設の紹介がある。さらに今回の特別企画として「SEIKEN 誕生記」があり、最後に、生研10年間の記録として、特別研究および科学研究費の交付状況、修

士・博士論文リスト、外国人研究者招聘リスト、年譜など詳細な資料が上げられている。

10年間の研究の概要の紹介には、記念誌の半分近い頁がさかれており、66頁から179頁までが各研究室に、180頁から189頁までが各附属センターにあてられ、生研の多岐にわたる学術史を俯瞰することができる。10周年誌以来の方式であるが、今回は頁の割付けを一新して、1研究室、または2研究室を必ず1頁に収め、レイアウトにも工夫が凝らされている。

「SEIKEN 誕生記」は、今回の記念誌の特別読物で、第二工学部が改組されて生研が誕生するにいたる事情が、生研所蔵史料にもとづいて紹介されている。生研編集の『東京大学第二工学部史』（昭和43年11月、開学25周年記念）に書かれた「新大学制度実施準備委員会で、生研の60講座を35講座に縮小する案がでたとき、大学の平和のため、かつ大学の良識に期待して、第二工学部は拒否権を発動しなかった」（86頁）という記述に注目し、創立当時の教職員たちがその表現にこめた想いを、当時の委員会でのやりとりなどから再現しようとしたものである。調査記録であり、正史は50周年の楽しみにとっておきたいと書かれているので、10年後に50周年記念誌とは別途に刊行されるであろう50年通史におおいに期待がもてる。

なお、同誌は研究・教育の記録に重点がおかれているので、事務部の写真技術班が数年前に映像技術室に変わったいきさつなどは紹介されていない。その外にも、生研事務部は、本学唯一の出版掛を置くなど興味深い点があるので、50年通史には事務部を含めた制度史にも叙述が及ぶことを期待したい。

沿革史料紹介（2）

『文部大臣准允』について

東京大学の組織、制度、式典に関する諸資料が収録されている『東京大学百年史』（資料一）中、たとえば「五通則」（分科大学—学部通則）に掲げられた資料の日付を見ると、㊦と㊧とが併記されている。㊦は評議会の議決日を示し、㊧が文部大臣の認可日を表している。このような併記がなぜ必要になるかと言えば、総長（総理あるいは学校長）の職務規程に大臣決裁事項と総長専決事項とが区別されているためである。当初は総長職務規程として特立されておらず、一つの規則中に盛り込まれていた。古くは明治8年の東京開成学校処務規制及権限にすでにそれはみられ、帝大創設後の明治21年3月に総長職務規程が創定された。明治14年、東京大学に四学部を統一する管理者としての総理職が置かれた時に制定された事務章程中、文部卿の裁可を必要とした事項と、総長職務規程中のそれとを比較すると、学生及生徒の入学規則、試業及学級進退、給費規則などが見当たらないほかは事項にそれほど大きな変化はない。初めての総長職務規程中文部大臣裁可の件は11項目あり、学科課程、諸規則の制定、授業料の額、外国人の雇入・雇止、地所及建物の増減、500円以上の学術上の器械標品薬品及図書の購入、交換、売却、図書の印行、経費中の目以上を流用する件、臨時休業などが規定されていた。

職務規程の記述が長くなってしまったが、本准允は、基本的に以上のような文部大臣の決裁を経た文書（伺書及び指令）の綴りである。簿冊の数は13冊である。時期は明治12年から昭和6年までの53年間に及んでいるが、16年分が欠けており、実質は37年分しか残されていない。その内訳を示しておこう。それぞれ各1冊である。明治12—14年、同16年、同17—18年、同19—21年、同27—28年、同28—29年、同30年、同32—33年、同34—36年、大正2—8年、同9—13年、大正14—昭和3年、昭和4—6年。昭和7年以降の准允綴り

は見当たらない。尚、簿冊名（背表紙名）は文部省准允、大臣准允とも表記されている。装丁は黒布表紙である。

資料の編綴は年代順に上から綴られ、通番号が付されている。前回の『文部省往復』のように局課、事項別の編成にはなっていない。各冊には必ず目次が付されているが、明治期と大正期とでは相違する。それは明治期は各年度の頭初に目次が付されているのに対し、大正期以降のものは同一人物の筆になる「大臣准允」なる表紙があり、目次はすべて簿冊の初めにまとめられている。

実際の件名をみると、分科大学（学部）の規則、学科課程の改正が多数を占めているが、明治28、29、30年は予算流用並更定関係のみが綴られている。このように本簿冊には途中欠本があったり、予算流用の件のみが編綴されるなど、方針に揺れがみられ、基本史料としては実に惜しまれる。ただ、さきに例示した（学部）通則などについては、簿冊名は変化するが、昭和7年以降もフォローできている。それは『学内諸規則』及び国立公文書館所蔵の『東京帝国大学規則』である。初期の准允のうち2、3の例をあげておこう。第1は明治14年1月裁可の「理学士教員一個ノ学校ヲ開キ生徒募集ニ依リ理學器械貸渡ノ件」は東京物理学校（現東京理科大学）開設にあたっての願書である。文中「講義日ハ日々之事ニ無之ユヘ講義日毎ニ借用シ講義相濟候ハバ其都度返納可致」とあり、その慌ただしさが目に浮かぶ。二つめは先に記した明治14年制定の事務章程にかかわる「加藤〔弘之〕総理大学ノ事務三学部内於テ取扱ノ件」である。当時東大はキャンパスが医学部は本郷、法理文三学部は神田錦町にわかれていた。どこで大学の総括事務をとるのかという問題。その点につき「該学事務之儀取扱候場所無之ニ付姑ク三学部内ニ於テ取扱候様致度」と伺い出て、同年7月7日「伺之通」と指令されていた。三つめは本学創設記念日の件。『通史一』には明治18年12月14日に上申したとあるのみで聞届の日付は記載されていないが、それは12月26日であった。（旧室員 中野 実）

受贈図書一覧（昭和63年11月～平成元年5月）

国立七大学ホッケーリーグ戦 第20回国立七大学総合体育大会 東京大学運動会ホッケー部 昭和56年7月	元文部大臣橋田邦彦先生を偲びて 吉田敏雄 昭和63年9月
国立七大学ホッケーリーグ戦 第27回国立七大学総合体育大会 東京大学運動会ホッケー部 昭和63年7月	上智大学史資料集 第4集 同大学史資料集編纂委員会 平成元年3月
生誕150年記念 図録大隈重信—近代日本の設計者— 早稲田大学 昭和63年10月	私学研修 第113号 私学研修福祉会 平成元年3月
都の西北—建学百年— 早稲田大学 昭和57年10月	野間教育研究所所蔵学校沿革史誌目録 野間教育研究所 平成元年4月
一宮の名宝（II） —開館一周年記念特別展— 一宮市博物館 昭和63年10月	従台北帝国大学設立到国立台湾大学現況 黄得時 昭和51年3月
中央大学史資料集 第三集 —東京大学所蔵中央大学関係史料— 同大学百年史編纂課 昭和63年11月	同志社談叢 第9号 同志社社史資料室 平成元年3月
幕末の農民群像 —東海道と江戸湾をめぐる— 横浜開港資料館 昭和63年11月	大型バドロン計画（第一段階） 東京大学原子核研究所 昭和63年9月
一橋大学学制史資料 第11集 同大学学園史刊行委員会 昭和63年11月	辰野俊子追悼集 飯長喜一郎ほか 昭和57年6月
博物館だより No.2 一宮市博物館 昭和63年3月	東京大学運動会報 第37号 東京大学運動会 平成元年3月
博物館だより No.3 一宮市博物館 昭和63年7月	日本大学精神文化研究所紀要 第20集 同研究所 平成元年3月
博物館だより No.4 一宮市博物館 昭和63年12月	中央大学百年史編集ニュース 第11号 同大学大学史編纂課 平成元年3月
富士論叢 第33巻第2号 富士短期大学学術研究会 昭和63年11月	中央大学史紀要 第1号 同大学大学史編纂課 平成元年3月
成瀬記念館 1988 No.4 日本女子大学成瀬記念館 昭和63年11月	中央大学史資料集 第四集 同大学大学史編纂課 平成元年3月
教育心理学科の三十年 肥田野直先生の御退官を記念する会 昭和56年3月	神奈川大学史資料集 第5集 新聞にみる戦時下、戦後の学園 同大学 平成元年3月
東京大学教養学部基礎科学科の20年 同設立20周年記念事業実行委員会 昭和60年9月	東京大学創立百年記念事業 報告書 同後援会 平成元年3月
法政大学史資料集 第12集 同大学史資料委員会 平成元年3月	埼玉県行政文書総目録 第4集 埼玉県立文書館 平成元年3月
	埼玉県行政文書件名目録 県報編I 埼玉県立文書館 平成元年3月
	文書館紀要 第3号 埼玉県立文書館 平成元年3月

訂正 前号受贈図書一覧中「教育週報」は
「(官報附録)週報」に訂正

史料室日誌抄録（平成元年2月～8月）

- 2.16 木 東京帝国大学英文カレンダー整理開始。
工学部附属総合試験所50周年記念誌制作協力のため同所にて内田祥三文書複写撮影。
- 2.17 金 坪井九馬三文書評価を史料編纂所益田教授に依頼。
- 2.20 月 東京大学年報マイクロ化撮影開始。
- 2.23 木 『東京大学史史料室ニュース』のコード ISSN 0915-3284と決まる。
- 3.6 月 『東京大学史史料目録』のコード ISSN 0915-3500と決まる。
- 3.10 金 鈴木敏行事務官生産技術研究所より専任室員として配置換。
- 3.13 月 第15回東京大学史料の保存に関する委員会開催。
- 3.17 金 『東京大学百年史』部局史の抜刷各部局に寄贈依頼。
- 3.20 月 『学内広報』人事異動記録を整理開始。
- 3.27 月 文学部にて大学一覧文学部便覧等所蔵状況調査。
総合図書館にて東大附属図書館史料資料調査。
- 3.31 金 中野実教務補佐員退職。
専任室員所澤潤（教育学部助手・併任広報企画課事務官）退職。
- 4.1 土 前室員所澤潤教務補佐員に採用。
- 4.5 水 NHK、テレビ放映用のため史料撮影。
- 4.12 水 『東京大学史紀要』第8号打合せ。
- 4.20 木 『東京大学史史料室ニュース』第3号配布開始。
- 4.25 火 肥田七郎関係資料受け入れ。
- 4.27 木 所澤潤室員、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会第54回月例研究会（於：山上会館）において「学
校文書館について」講演。
同上研究会参加者18名来室見学。
- 5.8 月 『文部省往復』マイクロ撮影開始。
- 5.10 水 学生部廃棄物より必要資料搬入。
- 5.11 木 『東京大学百年史』7階より地下書庫へ移動。受贈図書 of 整理開始。
- 5.18 木 『東京大学史紀要』第8号執筆依頼。
- 5.22 月 『東京大学史紀要』第7号配布開始。
- 5.25 木 7階及び地下書庫の棚組み立て。
- 5.26 金 本室保管の『クロニクルス・オブ・アメリカ活動写真』フィルム29巻を教養学部附属アメリカ研究資料センターに移管。
- 6.6 火 原室長、本室のセンター化につき総長と会見。
- 6.7 水 参議院議員岩上二郎氏に『東京大学史紀要』等を送付。
- 6.14 水 姫路文学資料館より来室、史料編纂掛関係資料複製。
- 6.15 木 関西大学年史資料編集課より2名来室見学。
- 6.19 月 第16回東京大学史料の保存に関する委員会開催。
- 6.27 火 東京都教育研究所より東京都教育史編纂準備のため2名来室見学。
史料編纂所にて駒場農学校文書等燻蒸。
- 7.1 土 7階に棚組み立て。
- 7.21 金 元室員中野実氏、岩波書店発行『憲法構想』の付録に史料室に関する記事執筆。
- 7.24 月 所澤潤室員、全史料協関東部会会報18号に本室関係の報告を発表。
- 8.1 火 韓国釜山商高歴史編纂委員会より1名来室見学。
- 8.18 金 教育学部よりワープロ管理換え。
- 8.21 月

題字 森 亘前総長

東京大学史史料室ニュース 第4号

発行日：1989年11月25日（年2回刊）

編集・発行：東京大学史史料室

東京都文京区本郷7-3-1

電話（812）2111 内線2036

印刷所：よしみ工産株式会社

北九州市戸畑区天神1-13-5

Archives Section of the University of Tokyo